

『追跡』

ニームは瀟洒という言葉が似合う美しい都市である。『天使王国』最盛期より貴顕や富豪の別荘地として開発された。末期ともいえる乱世となった今でも、この街は、その美しさを完璧な防備によって保持していた。

住民のほとんどは功なりし後の隠棲者と彼らの便を担うものばかり。

知られている限りの魔法設備が整えられ、王国の主要都市を網羅する転送空間網をそなえ、限られた人々しか利用できないが交通の便のよさは大商業都市ケルマデイクにも匹敵した。

ニームの城壁内に入るものは、ニーム当局が発行した通行証を所持しておらねばならず、また他人の通行証を持っていても入る事はできなかった。魔法的な力で認証を行っているらしい。

甚だしい事に人のみならず、城門を潜って入る生物は全て事前許可を必要とした。精査には守備隊付きの魔術師が付き添っている。

そうやって入城者を著しく制限している為か、ニーム都市内の治安は大変いい。

また金払いがよい住民ばかりである為、彼ら相手の商売をしようと制限されても尚、ニームにやってくるものは後を断たない。

ニームはまた、芸術、文化の発信地であり中心地である。

社会的に成功した者や事業に成功して引退した者が多いから、彼らをパトロンにして腕を振るう芸術家や芸人が集まってくる。

建物は付近で産出される白大理石が惜しみなく使われている。白亜に輝く都市を守る魔法防壁は風雨をも調節する。清らかな水源から上水道を通し、生活排水はまとめて付近を流れるメルロ川に流された。

街角には富豪たちの寄付よる素晴らしい彫像が並び、ニーム当局も街を美しく保つのに余念がない。

乱世であるからこのニームも美しい世捨て人を気取ってはられないが、

これまでのところニームに侵攻しようとした諸侯の軍はことごとく退けられるか、外交的努力により侵攻を断念させられてきた。常備の守備隊が優秀であるのは勿論のこと、各地の引退した有力者が余生を樂しむ為にニームで生活しているのだ。

その影響力を行使すれば、大概の侵略者は何らかの不都合が生じて侵攻そのものを中止せざるをえなくなる。

他国から攻撃されたり、難問を吹っかけられたり、内部抗争が激しくなったり、反乱が起きたり・・・。

とにかくニームは、攻めたり攻められたりが日常的になった現在の『天使王国』の中で、例外的に『天使王国』最盛期の平和な繁栄をそのまま維持する都市であったのだ。

それが、一日にして崩壊した。

やっとの思いで逃れてきた者たちの話によると、それは紅蓮の巨竜であったという。

空の彼方から飛来したそれは、あつという間に城壁外に広がる郊外の都市部を焼き払った。

外からニームにやってきた者たちが入城の許可をもらうまでの間滞在する街だ。

ニームに寄生するように自然発生した街区は、当然の事ながら、ニームの魔法防壁の外にあった。

襲撃は白昼堂々で行われたので、人々は恐慌に襲われ逃げ惑うばかりであったが、しかし名にしおうニームの守備隊は反応が早い。竜の間答無用の攻撃に交渉は不可能と見て、そうそうに大規模攻撃魔法の使用に踏み切った。

城壁の外にはまだ生き残っている人々がいたが、守備隊は躊躇せず吹雪や雪崩を召喚したという。

しかしニームに魔法防壁が施されているように、紅蓮の竜も対魔法障壁を持っていた。

守備隊の魔術師はそれを突破できなかったようだ。逆に竜の攻撃により、守備隊は蹂躪されてしまう。

竜はその上で美しい白い大理石の町並みを破壊していった。

もちろんニームの防衛軍はその総力を結集して竜を撃退しようと戦った。だが結果としてニームは戦いの中で崩壊していったのだ。竜は破壊と殺戮に満足すると、勝利の咆哮をあげ西の空に飛び去っていったという。

噂は数日のうちに広まった。ニームは七大公の都を除けば最強の防衛力を誇った都市だ。

それがたった一日で崩壊したとなれば、しかも転送魔法で着のまま逃げてきた住人たちの話を聞けば誰もが耳目を傾ける。生物としては最強と言われる竜でも万全の防備を固めた都市を崩壊させるのは容易な事ではない。

それができる赤い竜となればよほど年経たものでしかない。そんな竜は数限られている。名の通ったものしかない。

知らせを聞いた時点で諸侯はお抱えの魔法使いや、

知りうる全ての伝を使つて連絡をとつた高位魔術師たちにその竜の正体を探らせた。

もちろん高位神官、僧侶たちにも探索をさせる。

ところが竜たちの中でニームを襲つたものはいないらしいのだ。

わざわざ防御の硬い都市を、しかも自分たちの尊大な自尊心に挑戦するような行為をした事もない、人間達の隠遁の場所を襲う理由は、邪悪といわれる赤き竜たちにもなかった。

確かにニームは富裕な人間ばかり生活する都市であり、その金銀財宝が光りものに目がない竜たちの興味を引くが、だからといって下手に手を出せば大怪我をするかもしれないニームを、わざわざ襲う必要はなかった。

回答は善なる神々の神官たちからもたらされた。

相手の名前はロスペロツソ。悪魔の血を引く竜であること。地獄の住人であり、悪魔の軍団の先触れといつても良い存在であること。破壊と殺戮に喜びを見いだす恐ろしい悪魔であること。

それだけ解れば、やるべき事は一つだった。完全防備を施した都市一つを崩壊させた悪魔は、滅ぼすべきである。

天使たちが退去した今、『天使王国』を統括する執政官は存在しない。

そしてそれを補佐した七大公も実権を持たないものがほとんどだ。

それゆえ有力諸侯が連名で布告した。都市ニームを滅ぼした悪魔『ロスペロツソ』を倒したものに莫大な富と名誉を約束すると。

有力諸侯は互いに互いを牽制しあうばかりだ。

ニームを滅ぼした悪魔は脅威だが、それを倒す為に自らの軍勢力が弱体すれば、他の諸侯の餌食になってしまう。それならば賞金をかけて在野の『冒険者』に任せた方が楽である。

自分の領地が危険にさらされていないならば、あえて討伐する必要はないのだ。

ニーム崩壊の噂と同じ速さで、その布告も『天使王国』中に広まった。

そして、それは当然イリネアたちの目であり耳であるクレドネエの知るところとなる。

だがこれを聞いたクレドネエは密かに舌打ちをした。

恐らくこの『ロスペロツソ』という竜だか悪魔だかは、イリネアが捜し求めている仇であるのは間違いない。

国一つを滅ぼした竜ならニームを滅ぼす事だってできるだろう。そうそうそんな事をやってのける竜がいるとは思えない。

しかし、だからこそクレドネエには都合の悪い情報だった。

はつきりいつて彼がイリネアたちと行動をとにもするのは、ポルメリアのように善の使徒として悪を撃つ為でも、

イリネアやトウルスのように仇を殺す為でもない。ただ単に金の為である。

光りもの好きな竜のねぐらはお宝の山であるし、強い竜ほど莫大な財産を蓄えているから願ったりかなったりだ。

だがクレドネエは身の程を知っている。

彼はただの盗賊あがりであり、ポルメリアのような悪を撃つ為の騎士でもなければ、

イリネアのような弓の名手でも、ドウルワイトやリュイスのような呪文の使い手でもない。

トウルスのようなタフさもない。

仲間の為に竜の情報をもたらすのは彼の役目である。

だから彼は巧妙に自分たちのパーティが倒す事のできる赤き竜を選んで仲間達を誘導してきたのだ。

もともと、悪を滅ぼしたいポルメリアの嗜好を汲んで、色に構わず村落を荒らしたり、

都市を脅したりしている竜を標的にしたこともあったが、クレドネエにとっては儲けこそが大事なのであり、竜の大きさも色も大した意味はなかった。

彼にとってイリネアやトウルスの望む情報が入らない事は好都合だった。

お陰で悪に限定したとはいえ、莫大なお宝を蓄えている竜を殺し、彼の懐は潤うどころか一財産成すほどになっているのだから。

だから、その『ロスペロツ』討伐の布告は、まったくもってありがたくなかった。

二ームのような、手だれの盗賊すら潜入の難しい防備の固い都市を崩壊させた桁外れの悪竜と戦うなんて、まっぴらご免なのだ。

とはいえ、どの街の広場にも布告は出され、どの酒場でもその話題で持ちきりとなれば隠し通す事は不可能だ。

ならば他人の口から仲間が聞き出すよりも前から自分から報告した方がいい。

そしてその際に、この『ロスペロツ』とは係わり合いになりたくないクレドネエの意見に

賛同してくれる人間をあらかじめつくっておいた方がいい。

彼はそう考えた。

赤き巨龍を自分の仇と考えているイリネアやトウルスは問題外。

そして善なる軍神の下僕として悪を滅ぼす事に熱心なポルメリアもクレドネエの意見に賛成するとは思えない。

幸運の神を信仰するドウルワイトは、その場のノリで動いているようで、面白い方につくような気がする。

脈があるのはリュイスだ。

ポルメリアがパーティに参加するのにもいい顔をしなかった彼は、積極的に悪を滅ぼそうと考える人間ではない。

イリネアと同じ民族出身で、彼女の悲惨な体験の半分を共有するトウルスに対しても面白くないという態度を隠さない。

リュイスのような知的な男が、イリネアのような感性で動いている女に従うというのはなかなか想像しにくい、

しかしそこに異性への好意が存在するなら話は別だ。それに人は、自分とは反対の性格に憧憬のようなものを感じる生き物だ。

クレドネエはそのあたりも心得ている。リュイスを味方に引き込めば自分の意見も説得力を持つ筈だ。

なんとといっても彼はパーティのインテリである。正規の高等教育を受けた者は魔術師の彼しかいない。

「その『ロスペロツ』という奴がイリネアの仇だというのか」

「かもしれないってだけだ。国一つ滅ぼす赤い巨龍って情報だけで断定なんて不可能な話さ。ただ『ロスペロツ』っていう悪魔と竜の合いの子は、難攻不落の二ームを一日で崩壊させている。

イリネアたちがこいつを倒しに行こうと言い出すのは、目に見えているな」

立ち寄った村の居酒屋でリュイシスとクレドネエは二人で差し向かいに飲んでいる。

表向きは先日の戦いで手に入れたお宝の鑑定と処分をしいった帰りに、ちよっと一杯という事になっている。だが話の本题は違う。

「二ームの守備隊には兄弟子筋の人もいたんだが・・・そうか。無事ではすまなかっただろうな」

「それだよ、それ。二ームは大きな街じゃないが、守備隊はちよっとしたものだ。街に施された魔法防壁も半端なものじゃない筈。そんな連中が不意打ちとはいえ一日も持ちこたえる事なく負けたんだ。

俺達六人ばかりで喧嘩吹っかけて、かなう相手だと思っただけか？」

「命あつての物种か」

リュイシスはやや皮肉そうな笑みを浮かべた。だがクレドネエは気分を害した様子もない。本当の事だからだ。

「当然だろう。俺はお宝大事の盗賊あがり。イリネアにくつついて竜を倒しているのだから、竜のお宝が目当てだ。それはあんただって同じだろう？ 『城砦落し』 じゃあるまいし、正義の味方を気取るのは柄じゃない」

「まあな」

しかし口ではクレドネエに賛成しながらリュイシスの歯切れは悪かった。

黒い瞳は意識してクレドネエを見ていない。そうと悟ってクレドネエは軽口を叩いた。

「あれれ。俺の目がね違いかな。まさかリュイシスの旦那まで、

困っている人を見ると無償で助けたくてたまらんとか言い出すんじゃないだろうな？

『城砦落し』の病気がうつっちゃまったのか」

リュイシスはやや不機嫌そうに、ようやくクレドネエを見た。

「どうしてそうなる。俺はああいう奴は嫌いだ。

自分のやってている事がいつも正しい思い込んで、周りの迷惑なんて考えもしない奴など」

もちろん彼の言葉は不当なものだ。

ポルメリアはいつでも自分の行動に迷いながら、本当にこれが善なる行いなのかと自問自答しながら戦っている。脳天気な正義の味方というには程遠い。リュイシスにだってそれは解っている。

だが、そういうポルメリアの自省的な苦悩が苛立たしい。彼と彼女は決定的に相容れない性格なのかも知れない。

「じゃあ問題ないだろう。俺は金儲け。あんたは魔術の研究費稼ぎが本音だ。

命の切った張ったは柄じゃない。説得のネタを考えようぜ」

「・・・ああ」

しかしそれでもリュイシスの歯切れは悪かった。何を戸惑っているのか、最初クレドネエも頭をひねる。だがこの件に関してリュイシスが優柔不断になる原因は一つしかない。

ようやくそれに思い至って、クレドネエは溜め息をついた。

「イリネアか」

「まあな。あいつは自分の悲惨な人生を赤き巨龍のせいだと決め付けている。そいつを滅ぼす事があいつの人生の目的になっちまっているんだ。それを止める事がはたしてできるかどうか・・・」

つぶやくリュイシスに対して、クレドネエは、そいつは違うな、と危うく言いそうになった。

リュイシスが危惧しているのは止められるかどうかじゃない。イリネアがする事に表立って反対するのがイヤなのだ。

解りやすく恋する男になっているのだが、本人は色恋沙汰の経験が少ないせいとか、そのあたりに気づいていない。

しかしそれを指摘して機嫌を損ねるのはいい方法とは言いかねた。

こういう事を他人に指摘されて素直に受け入れる男は少ない。特に、リュイシスのように偏屈な男は。

クレドネエは別の話題で説得を始めた。

「なあ、俺達が『ロスベロツソ』とやりあつて勝てるかどうか、考えてみるよ。

確かに『城砦落し』と『龍殺し』は強いよ。それは保証する。『城砦落し』なんか傷を負った端から治っていくもんな。まあ、やられすぎて追いつかない時もあるが、そんな事は滅多にない。

『龍殺し』だって、その名に値する、大した坊主だよ」

『龍殺し』の二つ名を持つトウルスの、巨人用の大剣の破壊力は馬鹿げているほどだ。

大概の竜はポルメリアと殴り合っている横合いからトウルスに致命的な打撃を受けて力尽きる。

おまけにタフだ。さすがに傷が高速治癒する事はないが、ポルメリアに倍する体力があるかのように竜に対して攻撃を加える。

ポルメリアの防御能力とトウルスの打撃力。これを得てパーティは格段にその戦闘力を上げた。それは認める。しかし、

「だがよ、俺達はそんなでたらめーズとは違うんだぜ。今まであの二人の前衛が崩れる事はなかった。

だが都市一つを崩壊させた竜が、たった二人の前衛に遅れをとると思うか？

二人が倒れる間に俺達が逃げられればいいが、そうとは限らない。

その時、真つ先にやられるのは二人のすぐ後にいる誰かさんだろ」

パーティの戦術としてポルメリアとトウルスは前衛でありクレドネエは遊撃になる。

パーティ全体を支援する僧侶のドルルワイト。攻撃呪文を投げるリュイシスは後衛になる。

前衛と後衛の間には、必然としてパーティリーダーのイリネアが弓を持って立っている。

二人の次に危険なのは、遊撃のクレドネエを除けば彼女だった。

「あんたはそれを黙って見ていられるかい？」

クレドネエの言葉にリュイシスは僅かに震えた。確かにそれは魔術師の役割ではない。

パーティが敗北しないようあらかじめ手を打つのが魔術師だ。イリネアを守るには、

最初からその脅威に対抗手段を見出さなければならぬ。それがなければ『君子危うきに近寄らず』なのだ。

リュイシスはクレドネエの言葉に黙り込んだ。クレドネエもそんなリュイシスを放つて置いた。

結局のところ答えは出ているのだ。問題なのはどちらを選択するか、それだけだ。

クレドネエがちびりちびりと酒を飲み、リュイシスが黙ってテーブルとらみ合いをしている。時間にすれば大した事はなかったかも知れない。だがクレドネエには酷く長く感じられた。

注文したタンブラーから蒸留酒がなくなりかけた頃、ようやくリュイシスが顔をあげた。決心がついたらしい。

「イリネアを止める事はできないだろう。だが、確実に相手を滅ぼす方法を見つけようと提案する事はできる」

「時間稼ぎか。なるほどね」

無難な手段だと言えた。真つ向から反対すれば却ってやる気になるかも知れない。

だがいずれ叩くのだと言えば、こちらの意見に耳を傾げるかも知れない。

「いいだろう。その線でいこう。それならイリネアを説得できそうだ。

時間稼ぎしている間に誰か他の奴が倒しちまうかもしれないな。やっぱり魔術師は知恵者だよな」

少し酔いが回ってクレドネエは如才なくリュイシスを煽てる。だがリュイシスの方は気楽にはなれなかった。

「イリネアや『城砦落し』を説得するそれらしい条件をそろえなければならぬぞ。

『城砦落し』は嘘を見抜く。それをどうやって誤魔化すのか・・・」

「まあ、その辺は任せるよ。俺には解らんからな」

とにかく、クレドネエとしてはパーティーの教養人を味方に抱きこむまでが仕事だった。

あとの理由づけは、その知識が豊富な彼に任せるしかないのだから。

お気楽なクレドネエとは対照的にリュイシスは難しい顔のまま宿に戻る。

イリネアを死なせない為には、どんな事でもしよう。それが彼女の意に添わなくても、命あつたればこそではないか。

その言葉で無理矢理自分自身を納得させた。

翌日の昼下がり、パーティーのメンバーを宿屋の食堂に集めてクレドネエが仕入れた情報を告げる。

案の定、イリネアとトウルスの目の色が変わる。そしてリュイシスは反対意見を出した。

都市一つ滅ぼす竜と戦うには戦力不足だ。呪文にしても武器にしても、

もつと竜と悪魔の混血である『ロスペロツソ』に有効なものがある。それをクレドネエと自分が探し出す。

相手に挑むのはそれからでも遅くないと主張したのだ。

当然のようにイリネアとトウルスは凄いい勢いでリュイシスを睨みつけた。

しかしこれがイリネアを救う方法だと信じる彼は怯まない。

そこへ意外な援護が現れた。ポルメリアだった。

「私は魔術師どのの意見に賛成です。万端の準備を整えてから仕掛けた方がいいと思う」

仲間は皆一様に驚いた顔をしている。そしてクレドネエとドウルワイトは悪戯っぽい笑みとなった。

都市一つを崩壊させ、多くの人々を殺し路頭に迷わせ難民とした、

そして善なる軍神が最も忌み嫌う悪魔の血を受けた『ロスペロツソ』を、

すぐにも滅ぼそうと主張するかと思つたポルメリアが、思いもよらず慎重論を展開したのだ。

こういう事には最初からは積極的に参加しないドウルワイトと、
全てをリュイシスに任せる気になっているクレドネエは、他人事のようにこの展開を楽しみ始めていた。

リュイシスは意外な賛同者に最初驚いたが、しかし沈黙を守った。
彼女がどんな『正論』を吐くのか。それを見届けなければならぬ。

不機嫌なのはルトロウの二人だ。血を吐くような思いで赤き巨龍を滅ぼす事だけを考えて生きてきた二人にとって、
意見を異にする仲間が二人も現れたというのは裏切り行為に近い。

しかも最初から慎重だったリュイシスと違い、悪とみればすぐにもくっつかかるポルメリアから、そんな意見が出てきたのだ。

イリネアの怒りは酷く冷えたものになった。

「人の為に悪と戦うのが、あんたの使命とやらじゃないの？私の為には戦ってくれないの？」

しかしポルメリアは怯まない。却って落ち着いていた。

「今のまま、その悪魔と戦うのは危険です。万全の準備を整えてから挑まなければなりません」

「善なる軍神の使徒が臆病風？」

「相手の手の内を知らないで戦いを挑むのは無謀です。私は人々を守る為に命を賭ける事はできます。
しかし無駄死にするつもりはありません。調べあげるだけ調べ、必ず倒せる手段を見つけてから戦いは挑むべきです。
そうでなければ貴女は望みを叶える前に力尽きて死ぬだけです」

「そんなこと、やってみなければ解らない」

イリネアのむきになったその言葉にポルメリアは困惑の表情を見せた。

「どうしたのです、イリネア。いつもの貴女ならば、ちゃんと仲間の事を考えて決断する筈です。今の貴女はまるで・・・」

「まるで、なに？」

「・・・死にたがっているように見えます」

言われてイリネアは不意を突かれたようだった。

確かに彼女は赤き巨龍に関わる事となると頭に血が上るようだ。

しかしそれは一族や家族の無念の最後を思い、自ら舐めた地獄の苦しみを相手にぶつける為だった筈だ。

死を願う気持ちなど何処にもない筈だ。

だがポルメリアに言われてイリネアはすぐに言い返す事ができなかった。

もしかしたら、自分はこのろくでもない人生に終止符を打とうとしているのかも知れない。そんな疑問がふと沸いたのだ。

そしてその思いをトゥルスが静かに口にした。彼もまた、髪が真っ白になるほどの恐怖を味わっていた。

「案外そうかも知れんな。俺はあの巨龍と戦って死ぬ事を夢見ているのかも知れない」

「何故です？」

ポルメリアの疑問は素朴なものだ。生きているものは、可能な限り生き続けようとするものだ。自ら死を求める考え方は彼女にはなかった。

善なる軍神の召命を受けて以来、恐怖というものを忘れた彼女には、何かを恐れて自ら命を絶つという考えがないのだろう。だからトウルスの、もしかしたらイリネアの、その恐れに思い至らないのかも知れない。

「・・・巨龍を倒して、全てが終わっちまった時、さて次に何をして生きていけばいいのか、解らないからさ」

「貴方には、その剣の腕がある。今は戦乱の世です。人々の役に立つ方法はいくらかでもある。

巨人の大剣を使いこなす技術を後世に伝えるという手もある。やることはいくらかでもあるのではないですか？」

ポルメリアの言葉は正論だった。だがトウルスは困ったように鼻で笑った。まるで解っていない彼女を哀れむかのような笑いだった。

「お前はいつも前向きだよな。羨ましい時もあるが、鬱陶しいと思う時もある。

そうだな。やる事はいくらかでもあるだろう。だが、それをやりたくないって俺が考えたら、どうしようもないだろう？」

「何故です」

「巨龍を倒した後の人生なんて、考えた事もないし、考える意味もないからさ。

正直、あれと再び相対した時、俺はちゃんと踏み止まっていられるかどうか、自信がないんだ。

あれは、それほどに圧倒的だった。

俺はあれが憎い。俺の全てを奪ったあれが憎い。と同時に恐れてもいる。

あれにはとてもかなわないのではないかと、思う時がある。

だから、一日も早くその迷いを振り切る為に、奴にこの剣を突き立ててやりたいのさ。

自分がちゃんと使える戦士になっているのかどうか、確かめる為に」

トウルスの黒い瞳が深い闇となる。それは底のない深淵だった。深い悲しみと絶望を感じたものだけが見せる漆黒の闇だ。

クレドネエはそれに恐怖を感じた。こいつは少し狂っているのかも知れない。

余りにも絶望が深すぎて、まるで常識が働いていないのだろう。イリネアもそうなのだろうか？不安を感じて彼女を見る。

もしもそうならば、このパーティに先はない。何が何でも赤き巨龍に突っ込んでいって自滅するか、解散するか。

そうなる前にとんずらした方がいいのではないか？

だがイリネアはポルメリアとトウルスの会話を聞きながら苦悩していた。

赤き龍を殺す欲求と仲間のことを考える気持ちが彼女の中で責めざあっているようだ。

まだ大丈夫ということか？いや、トウルスの狂気がイリネアにも伝染したらどうなる？ポルメリアは二人を説得できるのか？

クレドネエは息を殺して成り行きを見守った。

「貴方は優れた戦士だ。私が保証する」

ポルメリアは唐突にそんな事を言い出した。

「戦い方は異なれど、私は貴方の力に感服している。それでは不足ですか？」

ポルメリアの清冽な青い瞳がトウルスの闇を貫いた。

一瞬トウルスの表情が惚けたが、しかしそれは束の間の事だった。皮肉な笑みが彼の頬に浮んだ。

「ああ、不足だね。他人がどういおうと、これは俺自身の事なんだ。俺が決着をつけたがっているのさ」

「その言い方は、まるで人生そのものの決着と言っているようですね」

「そうだよ。そう聞こえなかったか？」

「死に急いで、何になるというのです。貴方たちを見ていると単なる自殺願望者にしか私は見えません」

彼女の言葉は仲間達それぞれが感じていることだ。しかしあえて口にはしなかった。

それを言ってしまう事はイリネアに対してはばかられる。

二年余りを一緒に過ごしてきた仲間に対して、少々酷な言い方だと思っただ。

直言したポルメリアの白く美しい顔は淡々としていた。清冽な青い瞳はただただ真つ直ぐにトウルスを見ている。

トウルスとイリネアは同じように顔を赤らめた。込み上げる怒りが顔に出る。だがイリネアはそのままうつむいた。

トウルスだけがポルメリアを睨む。

「単なる自殺願望者、だつて？」

「私にはそのようにしか見えません」

激昂するトウルス。冷静なポルメリア。人の悪い笑みでクレドネエとドウルワイトは二人の様子を見ている。

リュイシスは顔を赤らめて沈黙したイリネアを見ている。

ただただ注意深く見ている。

「臆病風に吹かれた聖騎士に、そんな事は言われたくないね」

トウルスが言い返す。だがポルメリアはまったくといっていい程、動じなかった。

「臆病である事と慎重である事は違います。同時に、勇敢である事と無謀は異なります。

あなた方は頑是無い子供のように赤き巨龍と戦う事だけを望み、結果には興味がない。それは無謀とは言いませんか？」

誰かの忍び笑いが聞こえた。

トウルスはそちらを睨むが、クレドネエもドウルワイトも人の悪い微笑みを浮かべたまま怯む事もなかった。

ポルメリアは六人の中で最年少だ。

トウルスとてほとんど変わらない歳だが、最年少の子供といっても通る彼女に子供のようにだと言われては世話ない。

彼女は言葉を続けた。

「焦る事はないのです。そして戦うからには勝たなければ意味がないのです。私は剣の師匠にそう教わりました」

「師匠というのは、お前が殺したランカスタードの 事かい」

クレドネエは言わずもがなの茶々を入れる。

初めてトウルスとイリネアから視線を移したポルメリアの顔は、透き通るほどに悲しくて切ない微笑みを浮かべた。

「ええ、そうです。私は師匠を殺してここにいます。悪に染まったとは言え、私は師匠を殺しました。聖なる騎士などと言われる筋合いはないですね。」

しかし、その教えまで殺すつもりはない。騎士団にいた頃、彼は本当に良い師匠でした。勝つために最大限の努力を払え。私はそう心がけているつもりです。

トウルス。戦うからには勝たなければ意味がないのです。

勝つための最大限の努力を払ってから、その悪魔に挑んでも遅くはないでしょう」

ポルメリアは幼い容姿をしている。だが一人で過酷な旅を続けてきた。

誰にも助けを求めず、全てを自分自身で背負って孤独な戦いをしてきた。だからその言葉には年齢以上の重みがある。

トウルスはやや説得されたかに見えた。感情では反発している。だが理屈は理解している。

その折り合いができなくて苦悩する顔が浮んでいた。

「でもよぉ・・・俺は誰かに先をこされたくないんだ。奴の頭を砕くのは俺の剣なんだよ」

彼の呟きにポルメリアは困惑の表情を浮かべた。それこそ子供のだに聞こえたのかも知れない。

だが他の三人はそれで合点がいった。トウルスもイリネアも、とにかく赤き巨龍を滅ぼせばよいのではなかった。

自分の手で、できれば龍の脈打つ心臓の最後の鼓動を自分自身が止めたいのだ。それほどに二人の憎悪は激しいのだ。

不意にイリネアが顔を上げた。右の青い瞳には決心だけが見えた。

「奴を追うわ。ただしクレドネエとリュイシスは奴を倒すのに有効な方法を探してくるのよ。」

それが見つかり次第、奴を殺す。方法が見つかる前に、他のパーティが奴に襲い掛かるなら、それに協力する。いいわね」

何がなんでも赤き巨龍を仕留める瞬間に立ち会う気なのだ。ポルメリアとリュイシスはそれぞれの理由で口を開きかけた。だがドウルワイトとクレドネエの賛成でその機会は失われた。トウルスにもイリネアの決断に反対する理由はなかった。

ドウルワイトはどんな決断だろうと最終的にイリネアに従うつもりのようなようだったし、

クレドネエは、とにかく赤き巨龍との戦いの場から逃れる理由ができたので満足だった。

ロスペロツソを倒す手段が見つかったも、方法を連絡するだけであとは逃げ出すのも手だ。そんな事を考えていた。

リュイシスは、できればイリネアの側を離れたくなかった。だが何をどう調べれば相手の弱点を見つけられるか、それを一番良く知っているのは彼だから、自分の提案が受け入れられたらそのとおりに動くしかない。

ポルメリアは純粋に戦力が分断される事を恐れた。

だがいざとなれば自分が体を張ってトウルスとイリネアを止めるしかないと言ったようでもあった。

「イリネア。一つだけ約束して下さい。無茶はしないよ」と

ポルメリアは真剣な顔で頼む。それを見て誰もが苦笑いを浮かべた。

いつも真っ先に敵の前に飛び出て正面から殴りあう無茶をするのは、ポルメリアの方ではないか。

「いいつも無茶するあんたから言われても、ちょっと説得力ないねえ」

イリネアは茶化すように微笑む。だがポルメリアの表情は硬い。

「それが私の役割だからです。イリネア、貴方の矢が竜の急所を狙えるように、リュイシスの呪文が完成するまでの時間稼ぎを、そしてトウルスがもつとも有効な一撃を打ち込めるように、私は皆の壁でなくてはならない。

私は最後まで踏み止まり、そして最初に倒れる者でなくてはならない。」

でも貴女は違う。貴女は復讐するものだ。そうでしょうか？だから最後まで立って勝ち名乗りを上げなければならないのです」

これがポルメリア一流の諧謔なのだろうか。イリネアは首を傾げたが、苦笑いのままで受け取った。

「ご高配ありがとうございます。確かに私だって死ぬ気はないわ。それに『城砦落し』、あんたを殺すつもりもない。

だから今すぐ奴に襲い掛かる気持ちを押さえているのよ。大丈夫。皆揃ってあの世行きなんて事、絶対させないから。

トウルス。あんたもね」

不満げな『龍殺し』のトウルスは一人でもロスペロツソに立ち向かうと言いたげだった。

だが他の者達の視線を感じて口をつぐまざるをえなかった。

自分一人で生きてきた彼なのだから、仲間から離れて行動すると言いついたところで不思議はなかったが、しかし彼の口からその言葉は出なかった。

仲間と一緒に戦う利点をトウルスも見いだしているのだろうか？

「それじゃあ、善は急げよ。明日の朝から別行動をとるわ。連絡はリュイシスとドウルワイトの呪文で行う。よろしく頼むわね」

自分が望む形ではなかったが、話の持っていくきようではまだロスペロツソ殺しを断念させる事も自分だけパーティを離脱する事もできるのでクレドネエは賛成した。

ポルメリアとトウルスはそれぞれの理由で納得していないようだが沈黙で合意を示した。

ドウルワイトは他の仲間達を一通り見渡した後でリュイシスに目をやる。

明らかに彼は不満を抱き、そして苦悩していた。それを興味深く眺めたあと、ドウルワイトは賛成した。

「イリネアがそう決めたなら、僕は従うさ。リュイシスと打ち合わせて定期的に連絡を取れるようにしておく」

リュイシスはドウルワイトの言葉に短く同意の言葉を発しただけだった。

それで話し合いは終わりだった。皆は翌日二手に分かれて旅立つ準備をする為、それぞれの部屋に戻っていく。ただ打ち合わせと称してドウルワイトだけがリュイシスの部屋にやってきた。

この人間の少年のような風貌をした小人族の青年は、いささか人が悪い。顔には悪戯っぽい笑顔が浮んでいる。

「役どころ、変わろうか？」

「何の話だ」

リュイシスは不機嫌な様子で返事をする。

「イリネアの事が心配なんだろう？純粋な竜ならともかく、神々に仇なす悪魔が相手なら僕だって調べられるさ。その役目を交代してもいいって話さ」

一瞬リュイシスは顔色を明るくした。しかし次の瞬間には元に戻る。彼は自分の役割を痛いほど知っているのだ。

「だめだ。こっちはほとんど危険のない書物や噂話の調査だが、イリネアたちは奴を追跡しなきゃならん。

ロスペロツソが行く先々で破壊や殺戮を起こしているなら、その混乱に乗じてどんな奴らが徘徊しているか解らん。

『城砦落し』はともかく『龍殺し』やイリネアには自前で傷を回復させる術がない。お前はあいつらについでついでついでくれ」

ドウルワイトは興味深そうにリュイシスを見ている。その視線に気づいた彼は怪訝そうにドウルワイトを見返した。

「なんだ？」

「いや、本当にそれでいいのかと思って」

「いいも悪いも、仕方ないだろう。お前は俺の代わりに調べられるが、俺はお前のように傷を癒す術を知らない。

イリネアが望むのだから仕方ない」

「意外に生真面目なんだな」

「どういう事だ」

リュイシスは真顔で尋ねてくる。ドウルワイトはそんな彼から視線を逸らし、天井を見ながら考え込んだ。

これは本気で言っているのか、それとも誤魔化しているのか。

リュイシスは腹芸ができないほどの朴念仁ではない。しかし陽気な性格とも言いがたい。

頭の回転も速く知識も豊富だ。そして自分の感情を簡単には表に出さない。少なくとも無愛想な表情以外見た事はない。

しばらく考えたドウルワイトだが、結局どっちでも良いと気がついた。

自分は好意半分、興味本位半分で申し出た。彼はそれを断ったのだ。話はそれだけなのだとな納得した。

「まあいいや。今の判断を君が後悔しないなら、ぼかあ構わないから」

「・・・後悔などどうにしている。イリネアを止められなかったのだからな」

最後の返事がリュイシスの本音らしい。ドウルワイトは溜め息をついた。

「それが解っていて彼女から離れるとは！僕には理解できないねえ」

「俺がついていてもお前ほど役に立たない。それだけの話だ」

「理性的だねえリュイシス・・・面白くないほど」

「お前を楽しませる為に、俺は生きていく訳じゃない」

「はいはい。解りましたよ。それじゃあ、イリネアのお守りは君に代わって引き受ける事にします。」

それよりも『城砦落し』にお願いした方がいいか」

「どちらでもいい。同行するお前たちに頼る他ないんだからな」

「達観しているのね」

「考えても仕方ない事は、あまり考えないようにしている」

「賢明だよ。魔術師」

つまらなさそうにドウルワイトは溜め息をつき、リュイシスの部屋から離れた。

だがリュイシスにしてみれば事は単純ではなかった。

イリネアの側についていられない事が、どれほど苦しい事なのか他の者では解らないだろう。

そして自分よりもドウルワイトがついていく方がどれほどイリネアたちの為になるか知れない事も解りきっている。

答えなど初めから出ているのだ。それを覆したところで何にもならない。

リュイシスは自分が理知的である事に今まで誇りすら感じていた。だがこの瞬間だけは向こう見ずでない事を呪わしく思う。

それでも、人はそれぞれに相応しく振る舞う他ないのだ。

『城砦落し』が清冽な騎士でしかなく、『龍殺し』が竜を滅ぼすこと以外何も目に入らぬように、

そしてイリネアがその情熱の全てでようやく見つけた仇『ロスペロツ』を追い求めるように、

リュイシスは良かれと思つた事に最善を尽くすより他ない。

それが己が感情に反する事であつたとしても。

翌日、イリネアたちはニームの廢墟目指して旅立つ。微かにでも残っているロスペロツソの痕跡を求めて。

そしてリュイシスとクレドネエも出発する。この近辺でもっとも文献や情報に接する事のできるケルマディクに戻るのだ。

「じゃあ、朗報を待っているわ。早く追いついてね」

イリネアの言葉にリュイシスはうなづく。クレドネエは危うく、そんなに慌てなくてもと言いかけて口を押さえた。

ロスペロツソを追い駆けるイリネアとトゥルスに引きつられるように四人が旅立っていく。

その後ろ姿が消えるまで、リュイシスは見送った。

「まあ、ゆっくりやろうぜ。俺達が調べ終わらないとイリネアも仕掛けないさ」

クレドネエがお気楽に言う。だがリュイシスは無言でケルマディクに向かった。慌ててクレドネエが後を追う。

そんな事は言っていられなかった。一刻も早くロスペロツソについて調べなければならぬ。

例えそれが彼女を危険に晒す事になろうとも、自分が彼女の元に戻るには、そうするより他にないのだ。

リュイシスの耳にクレドネエの文句は届かない。

追いたて、追い詰め、滅ぼす。

彼女の未来はその果てにしかないのだから。